

英語ディベートクラスにおける 動機づけと TED トークの有効利用 ープレゼンテーション能力の向上を目指してー

Motivating Students through TED talk within the English Debate Class : Targeting at Improvement in Presentation Ability

鹿島 千穂¹

Chiho Kashima²

要旨

小学校から高校に至る英語教育が変わるなか、大学生にはより高度な英語コミュニケーション能力が求められている。本学国際文化学部国際コミュニケーション学科における英語ディベートのクラスでは、ディベートに不可欠な英語によるプレゼンテーション能力を向上させるために、動機づけの観点から、TED トークの視聴を含めたいくつかのストラテジーを授業に取り入れた。本稿は、英語プレゼンテーション能力の向上に動機づけが有効であることの実践報告である。

キーワード： 英語ディベート、動機づけ、プレゼンテーション能力、TED、実践報告

Keywords: English Debate, Motivating, Presentation Ability, TED, Practice Report

1. はじめに

2015年8月、中央教育審議会は小学校から高校に至る教育の内容を定める学習指導要領の改訂骨格案を明らかにした。それによると、現在小学5年生から行われている「外国語活動」は3年生からへ前倒しとなり、5年生からは英語が正式な教科に格上げされる。5、6年生の英語の成績は採点・評価され、授業数も週1回から週2回に増える見込みだ。また、中学校の英語は高校と同様に英語で授業を行うよう求められており、より対話が重視され、今以上にコミュニケーションに重きを置いた指導に拍車がかかりそうである。さらに、高校では時事問題などを英語で発表する力を養うことが盛り込まれた。³

小学校から本格的な英語教育が行われ、中学校と高校の英語が文法中心からコミュニケーション重視へと転換するなか、大学における英語教育も変革を迫られている。高校まで

¹ 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科, 005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Department of International Communications, School of International Cultural Relation, Tokai University, 5-5-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

³ 文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp>) 中央教育審議会, 初等中等教育分科会, 教育課程部会, 「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」平成27年8月26日。

の6年あるいは8年間の英語教育を終えて大学に入学した学生たちのなかには、以前に比べてスピーキングやリスニングの基本的な能力が向上している者も多い。各大学ともそのレベルにふさわしい英語教育を行うよう努力しており、学生たちの英語コミュニケーション能力を向上させるため、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーションといった発信型の英語学習クラスの充実を図る大学も増えてきている。

筆者は2009年から本学国際文化学部国際コミュニケーション学科の英語ディベートの授業を担当している。この授業では中学校と高校で培ってきた英語コミュニケーションのスキルに磨きをかけ、単なる英会話や狭義のコミュニケーションのレベルを超えて、アカデミックな内容に対応できる力を養うべく、学生たちの“論理的な思考力”と“英語での発信力”を伸ばすことを目標に授業を行っている。

なかでも、ディベートに必要な不可欠な英語でのプレゼンテーション能力を向上させるために、筆者は動機づけが有効であると考え、動機づけのストラテジー⁴を授業に取り入れ実践してきた。本稿では、英語ディベートクラスにおける学生たちの英語プレゼンテーション能力の向上とその達成方法について、動機づけの観点からの取り組みを報告する。

2. 英語ディベートクラス

2015年度春学期の英語ディベートの授業は19名が履修し、全員が3年生であった。内訳は男子学生6名、女子学生13名である。受講した学生のほとんどが英語や海外に強い関心を持ち、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドなどへの短期の留学経験⁵がある者が半数以上いた。また、ばらつきはあるが2002年に始まった小学校英語教育により、小学校時代に学校で英語に触れた経験のある学生も含まれる。

英語ディベートの授業は、英語そのものを教える授業ではない。学生たちに身につけてほしいのは、“論理的に議論を展開できる思考力”と“英語による高いプレゼンテーション能力”である。これらの能力を伸ばすために、①クラスルームでの雰囲気づくり、②ディベートの題材、③視覚的なアプローチという3つのポイントを軸に、学生たちの動機づけを高めることを意識して授業を展開した。

3. 動機づけとは

外国語学習の動機づけに関しては、これまでに多くの研究が行われている。先駆的なものとしては、カナダのガードナーらによる社会心理学の枠組みを使った「統合的動機づけ」と「道具的動機づけ」、そして教育心理学的アプローチから出てきた概念として、アメリカのデシラによる「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」などがある(廣森 2010, p.49-51)。

さらに、ドルニエイは、第二言語習得の動機づけ研究における新しいモデルとして、動機づけを動的(dynamic)なものとして捉え、「過程志向アプローチ」(process-oriented approach)に基づき、「時間の経過による動機づけの変化」に注目した。ドルニエイによれば、動機づけには次のような段階がある(ドルニエイ 2005, p.20-23)。

⁴ 3章で詳述するドルニエイ(2005)によれば、動機づけストラテジーとは、体系的で長続きするプラスの効果を実現するために、意識的に与えられる動機づけの方法のことである。

⁵ 短期の留学経験とは、1ヶ月から3ヶ月程度の語学留学である。

1. 第1段階「選択動機づけ」(choice motivation)

学習の初期段階で産み出された動機づけであり、目標設定や意思の形成、行動の開始、などの機能がある。

2. 第2段階「実行動機づけ」(executive motivation)

第1段階で産み出された後、維持され、保護されなければならない動機づけであり、学習体験の質や学習ストラテジーに影響される。教室環境での学習に密接に関連している。

3. 第3段階「動機づけを高める追観」(motivational retrospection)

学習の経過を学習者自身が回顧的に評価することによって生じる動機づけであり、フィードバックや成績、自信や自己価値などに影響される。学習ストラテジーの修正や新たな計画を立てる、といった機能がある。

クラスルームの学生たちは「良い成績をとりたい」「就職に役立てたい」という気持ちや、英語や英語圏の文化への興味といった選択的動機をすでにもって授業を受講しているはずである。それは当然のこととして、その上で、英語で発信することや英語でのプレゼンテーション、論理的に考えることの楽しさを自覚し、知的好奇心が刺激され、学習意欲向上へと繋がっていくような動機づけの仕組みを授業に取り入れることが大切である。また、ドルニエイが言うように、学生たちの動機づけが変動し、ある程度の浮き沈みを経ながら進んでいくとしたら、どの段階でどのような授業展開をすれば動機づけを維持することができるのかを考え、授業をデザインすることが教師に求められている。

4. クラスルームでの実践内容越えて

4.1 学習者中心型の授業

廣森は、「周りの支え」には動機づけを支える重要な役割があるとする。他者との友好的な関わりは、課題に対して消極的な学習者を学習活動の中に引き込み、結果として動機づけを支える重要な役割を期待できるとしている(廣森 2010, p.64-65)。また、ドルニエイも、学習者同士が教室で協力し合うことは動機づけを高めるうえでの非常に強力な手段になるとしている。協調的な環境にいる学習者の方が、他の教室体制にいる生徒よりも学習により積極的な態度を保持し、より高い自尊感情や自信を発達させるとし、学習者間の協力を推進している(ドルニエイ 2005, p.119)。

以上のことから、一緒にタスクに取り組み学ぼうとする仲間存在は動機づけのひとつになると考え、クラスルームでは、合わせて「学習者中心型の授業」を取り入れた。なぜなら、学習者中心型授業はグループによる学習を形態とし、学習者が能動的に学習に参加すること、そして互いに助け合い、リラックスした雰囲気の中で学べることから、より高い学習効果が期待できるとされているからである。

リラックスした雰囲気が学習環境として良い理由を、第二言語習得の理論として広く知られているクラッシュェンの「モニターモデル」を使って説明したい。このモデルのなかにある「情意フィルター仮説」は、学習者に不安や自信のなさがあると情意フィルターが高くなり、言語の習得がスムーズにいかないという説である(クラッシュェン 1986, p.44-45)。人前で慣れない英語を使ってプレゼンテーションするのはストレスを感じるものである。学習者中心型授業でリラックスした雰囲気を作り出すことができれば、学習者の情意フィ

ルターが低くなり、学習への意欲が上がるのではないかと期待したのである。

具体的には、ディベートの命題を決めた後、賛成 (affirmative) 反対 (negative) それぞれ 3 人から 4 人のチームに分け、ディベート本番のための準備をグループごとに行った。その際、他人任せになることがないようにディベートで必要となるデータや参考文献は、必ず一人ひとつ以上持ち寄り、それをもとにチームで話し合いを進めながらディベートの準備をした。次第に学生たちに笑顔が見られる程リラックスした雰囲気が生まれ、またチーム内でじっくり話し合い意見をまとめていくことでチームの結束力が高まっているのが感じられた。なお、全 15 回の授業のなかでディベートの試合を行ったのは 3 回であったが、毎回なるべく違う学習者同士でグループを組めるよう配慮した。

4.2 ディベートの題材

ディベートの題材をどのような内容にするのかも慎重に考える必要がある。鈴木は、「外国の事情を知り、外国から何かを学ぶ目的で、もっぱら国内向けに学校で学んだ、情報の受信解読専用の英語力では、逆に外国に向かって、自分の考えや日本の事情を説明し、相手を納得させるという、外向きの発信は必ずしもうまくゆかない」(鈴木 1999, p.106) と述べ、英語の授業での国際理解をやめ、外国からの情報の受信に徹した近代日本の英語教育から脱却し、日本の歴史や文化、平素日本で見聞きするさまざまな事柄を英語で表わす訓練が必要だと主張する。

先にも述べたように、英語ディベートの授業を受講している学生たちは海外に強い関心を持ち、短期ではあるが留学経験のある者も少なくない。しかしながら、ディベートの題材は、国際情勢や海外の事象は避け、日本国内で起きている問題や日本の文化風習にまつわるものを選ぶようにした。たとえば、「投票権が 20 歳から 18 歳に引き下げられることについて」「年間 20 万人の移民の受け入れ案について」「マイナンバー制度は良い案か」「小学校英語は将来的に 1 年生からにすべきか」など、日本で起きている、もしくはこれから起こることにに関して議論した。これらの題材は国内の問題ではあるが、実は世界各国の状況と比較することで日本の姿が見えてくる内容であり、全くドメスティックな題材ではない。実際に、若者の投票権やマイナンバー制度、小学校英語に関してはすでに実施している諸外国の状況を調べてきて比較する案を出す学生もおり、移民の受け入れ問題に関しては外国人とどのように共存していったらよいのか、という視点から論じようとする学生もいた。海外を意識しながら国内の問題を考えてみることは、多角的な視野で物事を捉えることに繋がり、議論に厚みが増したと感じられた。

グローバル化が進む今だからこそ、自らの文化を理解し発信していくことは、今後の英語教育に欠かせない視点である。さらに、学生たちにとっては、国内で起きている問題や日本の文化風習にまつわる話題であれば、すでにインプットされている知識をもとにリサーチがしやすく、身近な出来事であるがゆえに自分の意見を述べやすい。取り上げる題材は、学生たちの好奇心のゆくえを左右する。動機づけのための大事な要素のひとつである。

4.3 視覚教材の利用

次に、アカデミックな英語プレゼンテーションの手本として、学期の途中に一度だけ TED トークを視聴させた。タイミングは、全 15 回の授業のうちの 8 回目、ちょうど折り

返しの回である。それまでの授業では、ディベートとはどんなものなのか、なぜディベートをするのか、ディベートをすることでどんな力がつくのか、ディベートの具体的なやり方など基本的なことを教師が説明し、学生たちは1度簡単なディベートにチャレンジしている。しかし、この時点ではプレゼンテーション能力がそれほど高くないせいで、話している内容が十分に相手に伝わっておらず、緊張感ばかりが伝わってくるという状況であった。このレベルから一歩抜け出すために、視覚教材としてTEDトークを導入した。

4.3.1 TED (テッド) とは

TED は Technology (テクノロジー) , Entertainment (エンターテイメント) , Design (デザイン) の頭文字をとったものである。この3つの分野からスピーカーを集め、“Ideas Worth Spreading (価値あるアイデアを広めよう)”というコンセプトのもと登壇者がプレゼンテーションやパフォーマンスを行うイベントで、年に1度カリフォルニア州モントレーで行われていた。その後、TEDx (テデックス) という形で、TED からライセンスを受けた自治体や大学、一部組織によるプレゼンテーションイベントが各地で開催されるようになり、現在ではその分野も、ビジネス、科学、国際問題、教育など多岐に及んでいる。

スピーカーによるトークは10分から20分ほどで、どのプレゼンテーションも優れた知見や考察、洞察などを含み、自分の世界や価値観を広げてくれるようなアイデアに満ちたものばかりである。TEDxTOKYO の代表者ニューエルによれば、TED トークからは、「インスパイア (Inspiring)」「変化し続ける (Transforming)」「楽しさ (Entertaining)」「演出力 (Show)」「何が起こるかかわからない (Never Know What to Expect)」の6つのエッセンスが得られるという。TED に参加すると、たくさんの刺激的な人たちや素晴らしいトークに「衝撃」を受け、衝撃を受けることで「インスパイア」され、考え方や生き方に影響を与えてくれる。同じスピーカーでも登壇するたびに違うテーマや以前のテーマを発展させた「変化し続ける」トークを見せてくれる。そのトークは「楽しさ」と「演出力」に満ちていて、「何が起こるかかわからない」おもしろさがある (ニューエル 2014, p.55-56)。

TED に登壇するスピーカーは、基本的に台本をもっていない。大勢の観客の前に一人堂々と立ち、自分の専門分野あるいは人生で学んだことなど価値あるアイデアを発信していく。ニューエルが指摘するように、TED のプレゼンテーションには「演出力」があり、人を魅きつけるプレゼンテーションの手本のようなトークが多い。話すスピード、間の取り方、スピーカーの表情などが絶妙なのだ。また、論の展開がしっかりしており、プレゼンテーションの準備の段階でどのように話の内容を組み立てていけばよいのかの参考にもなる。さらに、すべてのTEDトークはウェブサイトで公開されていて⁶、興味があれば何度でも見ることができるため、継続的な学習にも繋げることができると筆者は考えた。

4.3.2 TED を使った授業展開

では、どのような内容のTEDトークを選べばよいのだろうか。膨大な数のTEDトークの中から、プレゼンテーションの技術的な面において良い手本になり、なおかつ内容は学生たちの心に響くような、最適な1本を探し出すことが課題であった。最終的に選んだの

⁶ TED トークは、<https://www.ted.com/>で視聴することができる。

は、アメリカの心理学者 Meg Jay⁷による「Why 30 Is Not the New 20」というプレゼンテーションだ。「なぜ 30 代は新しい 20 代ではないのか」という一見わかりにくいタイトルではあるが、最近アメリカでは、20 代は 30 代を前にしたモラトリアム期間だと思い時間を無駄に過ごしている若者が多いと、プレゼンテーションのなかで Meg が警鐘を鳴らしている事態は、大学 3 年生の彼らにとって他人事ではないと思い授業で使用することにした。

心理学者として若者のカウンセリングにあたる Meg は、具体的な例を挙げながらユーモアを交えて話す。話し方はエレガントで、会場の反応を見ながら間をしっかりと取り、リラックスしているような雰囲気さえ感じる。話すスピードは学生たちには少し早いかもしれないが、日本語字幕が出るバージョンを使用したので内容の理解に問題はなかった。今回の TED トークの使用目的は、あくまでもプレゼンテーション能力を育成するためのものであり、リスニング力を鍛える授業ではないので、あえて日本語字幕がついたものを視聴し、内容の理解を優先させた。

Meg は格言のような感じで印象的なフレーズをいくつか使ったが、なかでも「人生で重要なことの 8 割は 35 歳までに決まる」や「就職後、最初の 10 年で生涯賃金が決まる」などのフレーズは、学生たちに衝撃的だったようだ。また、Meg はプレゼンテーションの最後に、若者たちが今なすべきことを 3 つ提案する。それは、「Get Identity Capital (自己投資をする)」「Use Your Weak Ties (細いつながりを利用する)」「Pick Up Your Family (家族を選ぶ)」である。このアイデア自体も斬新なメッセージであるが、ポイントを 3 つに絞って並べるという、欧米のスピーチスタイルではよく使われるが日本人にはあまり馴染みのない手法が、論理的に物事を伝える際に効果的であることを、学生たちは実感したようである。

なお、TED トーク視聴の前には TED の説明と Meg のバックグラウンドを紹介し、TED 視聴中は彼女のプレゼンテーションの仕方で気がついたことと印象的なコメントをメモするように指示した。それをもとに、視聴後はクラス全体でディスカッションした。



図 1 TED トーク視聴の様子

4.3.3 TED 視聴の効果

TED トークの視聴後に、「TED トークを見る前と見た後で、プレゼンテーションに対し

⁷ 成人の発達を専門とする臨床心理学者で、著述家。バージニア大学助教授。

てのあなたのイメージや考えがどのように変わりましたか？」という問いを学生たちに投げかけ、記述する形で答えてもらったところ、次のようなコメントがあった。

- ・ 資料作りも大事だが、話し方も大切だと思った
- ・ 自分の伝えたいことを伝えるためには、話し方にポイントがあることがわかった
- ・ ただ説明するだけではなく、聞いている人にいかに興味をもってもらえるか、聞きやすくするかを計算して工夫していた
- ・ 自分の伝えたいことを淡々と伝えるのではなく、オーディエンスへの質問、ジェスチャー、声の強弱など、相手に共感をもってもらえるようにしていた
- ・ 聞き手に考える時間を与えたり、リラックスした話し方だったり、テクニックが重要だとわかった。固いプレゼンテーションのイメージが、柔らかいものになった
- ・ 自分が今までやってきたプレゼンテーションの方法と違って、アイコンタクトや間を上手に使っていたり、ユーモア溢れるもので、心地良く聞くことができた
- ・ プレゼンテーションは、どれだけ相手が共感してくれるかもポイントだと思った
- ・ 自分の伝えたいことを3つのポイントでまとめるなど、話の構成が大事だと思った
- ・ すごく惹きつけられるプレゼンテーションで、自分もこんな風にしたいと感じた
- ・ プレゼンテーションは人の心を動かすものだというイメージが変わった

以上のように、TED トークの視聴は、プレゼンテーションのスキルを学ぶことに加えて、これまでのプレゼンテーションの概念を良い意味で覆す経験となったようだ。

この感覚を忘れないうちに、この週は新聞記事から興味のある記事をひとつピックアップし、背景と問題点を調べ、3分以内の口頭発表にまとめるという宿題を出した。翌週、一人ずつ英語でプレゼンテーションしてもらったのだが、書いてきたものをただ読み上げるのではなく、ゆっくりしたスピードで、アイコンタクトを取りながら、リラックスした雰囲気の中で発表している学生もいた。何より一人一人のプレゼンテーションに「伝えよう」という意識が感じられた。この点で、TED トークの視聴は有効であったことがわかる。

もうひとつ、TED トークを授業に取り入れたタイミングについても言及したい。学習者の動機づけは時間の経過によって変化するとし、動機づけを維持し保護することが大事だと主張するドルニエイは、「実行動機づけ」を高めるために、①学習の単調さを打破する②課題をより面白いものにする③生徒とのかかわりを増やす、という3つのストラテジーを提示している。このうち、学習の単調さを打破するために行う例として、「コミュニケーションのチャンネルを変化させる」ことを薦めている。具体的には、学習に対応する様々な聴覚、視覚、触覚方法を変えることで実現が可能だとし、視覚的教材の重点的な使用が効果的だとしている（ドルニエイ 2005, p.86-87）。授業でTED トークを視聴した8回目の授業は、全15回のうちのちょうど折り返しで、ドルニエイの言う「選択動機づけ」が薄れ、学生たちの集中力が途切れ始める時期であった。そのタイミングで視覚的教材を使用し刺激を与えたことは、授業の後半に動機づけを維持することにも繋がったはずである。

5. 考察

以上、①クラスルームでの雰囲気づくり、②ディベートの題材、③視覚的アプローチ、

という3つをポイントに、学生たちの動機づけを高めながら、英語によるプレゼンテーション能力を伸ばす取り組みを紹介した。筆者は英語ディベートの授業を2009年から担当しているが、この方法を取り入れたのは2014年からであり、今年は2年目であった。1年目に学生の反応が予想以上に良かったことから、今年は動機づけをより意識しながら授業をデザインすることを心がけた。その結果、学生たちは毎回課題をきちんとこなして授業に臨み、欠席者もほとんどなくやる気が感じられたこと、また、学生たちのプレゼンテーションがディベートの回を重ねる毎に良くなっていき、そのことがさらなるやる気に繋がっていったことから、この方法は一定の効果があったと思われる。

外国語学習の動機づけにおいて、学習そのものの楽しさを自覚し、知的好奇心を刺激することは非常に大事である。動機づけの戦略はさまざまあるが、いくつかを組み合わせて複合的にアプローチしていったことが、功を奏したのではないかと考えられる。

6. 今後に向けて

最後に、「効果的なフィードバック」にも触れておきたい。ドルニエイによれば、成績を除けば、学習者の学習行動にもっとも顕著な変化をもたらすのは、教師が授業中あるいは書面で彼らに与えるフィードバックである。動機づけの観点から見た効果的なフィードバックの特徴は3つある。第1は、フィードバックは適切な時期に行えば、満足感を与える機会をもちうることで、第2は、励ますことで、学習者の肯定的な自己概念と自信を高めること、第3は、学習者に改善を要する箇所を建設的に熟考させることで、学習効率を高めるために自分ができることを確認させることである（ドルニエイ 2005, p.147-148）。

ディベートの勝敗は、学生たちの満足感を高め、学び続けるための大きな動機づけになっていたはずである。それに加えて、教員からのフィードバックも重要である。ディベートの試合の際、筆者はファシリテーターと審判を担当しており、勝敗を発表する前に軽くコメントをしていたのだが、より詳しいフィードバックはハンドアウトにまとめて翌週学生たちに配布した。しかし、1週間後に行う、前の週のディベートの話は、学生たちの興味をそれほど惹いていないように思えた。

ドルニエイも、「フィードバックは遅れて与えるよりもただちに与えた方がはるかに効果的である」としている（同 p.149）。ファシリテーターと審判をしながら、しっかりしたフィードバックを与えるにはどうしたらよいただろうか。今後の課題である。

参考文献

- 白井恭弘（2008）『外国語学習の科学－第二言語習得論とは何か』岩波新書
鈴木孝夫（1999）『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書
スティーブン・D.クラッシュン、トレイシー・D.テレル著／藤森和子訳（1986）『ナチュラル・アプローチのすすめ』大修館書店
ゾルダン・ドルニエイ／米山朝二、関昭典訳（2005）『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店
パトリック・ニューエル（2014）『TED パワー 世界と自分を変えるアイデア』朝日新聞出版
廣森友人（2010）「動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」（小嶋英夫,尾関直

子,廣森友人編『成長する英語学習者—学習者要因と自律学習—』第3章 大修館書店)

(受付日 2015. 8. 29 受領日 2015. 10. 16.)